

トヤマエビ



紅白の縞模様がある深海性のエビで、県内ではふつうボタンエビと呼ばれる。昔、富山湾で初めて生態調査が行われたので、トヤマエビという標準和名が付けられている。標準和名がボタンエビという種類もいるが、これは全く別物である。寿司ダネや煮物として食べることが多い。ベーリング海をはさみ、日本海からバンクーバー島近海までの北太平洋に広く分布しており、国内では北海道沿岸で漁獲量が多い。雄性先熟(ゆうせいせんじゅく)の性転換を行い、2～3歳が雄、4歳以降は雌になる。産卵期は3～5月で、受精卵を腹肢の間に付けて抱卵する。抱卵数は約8千粒で、約10か月後の1～3月に孵化する。成長は、1年で体長6センチ、2年10センチ、3年12センチ、4年14センチ前後と推定される。大きいものでは体長約20センチに達し、寿命は10年以上と考えられている。

富山湾では、水深200～400メートルの大陸棚の急斜面で、小型底曳網やかご縄で漁獲される。漁獲統計上は、「その他のエビ類」の項に含まれる。この項は、1963・64年に300トンを超えていたが、近年は約10分の1(30トン前後)まで減っている。トヤマエビはこの項の約40パーセントと推定されており、近年の漁獲量は10トン前後と考えられる。主産地は新湊と滑川で、2地区合計が県全体の90パーセントを占める。

富山湾におけるトヤマエビの種苗放流は、1985年から日本栽培漁業協会小浜(おばま)事業場が、また、水産試験場でも、1996年から深層水を利用した種苗生産と放流を行っており、近年の放流量は20～30万尾と安定している。種苗は放流器に収容し、水深200～300メートルの海底付近まで沈め、船上から音波を発信することにより、放流器の蓋を開けて放流している。

1997年の水産試験場における生残率は、種苗生産段階(全長15ミリ)までが64パーセント、それ以降、中間育成(30ミリ)までは85パーセントと高い値を示している。稚エビの生産技術は、現在ではほぼ確立されており、量産体制も出来つつある。標識をつけて放流した親エビや1歳エビの追跡調査の結果から、トヤマエビの移動は小さく、定着性が非常に強いと考えられる。

今後、トヤマエビ資源の回復・増大を図るためには、栽培漁業的手法と資源管理の両面からアプローチする必要がある。課題としては、①深層水利用(親エビ養成)による卵の大量確保、②100万尾規模の大量放流、③放流適期、適地およびサイズの解明、④稚エビも含めた分布や移動の解明、⑤資源量の把握とそれに基づく適正漁獲量の推定、⑥漁獲制限による稚エビや親エビの保護、などが挙げられる。(角)

